



John Axelrod

Conductor

ジョン・
アクセルロッド
指揮

©Stefano Bottesi

ルツェルン響・歌劇場音楽監督兼首席指揮者、フランス国立ロワール管音楽監督、ミラノ・ジュゼッペ・ヴェルディ響首席客演指揮者、スペイン王立セビリア響音楽監督などを歴任。2020年4月、京響首席客演指揮者に就任。

ベルリン放送響、NDRエルプフィル（北ドイツ放送響）、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、パリ管、フランス国立リヨン管、ロンドン・フィル、ロイヤル・フィル、フィルハーモニア管、ローマ・サンタ・チェチーリア国立アカデミー管、ロイヤル・ストックホルム・フィル、デンマーク国立響、オスロ・フィル、スウェーデン放送響、ウィーン放送響、ザルツブルク・モーツァルテウム管、シンフォニア・ヴァルソヴィア、ロサンゼルス・フィル、フィラデルフィア管、シカゴ響など、これまでに150以上の世界各地のオーケストラを指揮、たびたび再招聘されている。オペラではブレゲンツ音楽祭、パリ・シャトレ座、ミラノ・スカラ座などに登場。現代作品にも積極的に取り組んでいる。

John Axelrod was formerly Music Director and Chief Conductor of Luzerner Sinfonieorchester und Luzerner Theater, Music Director of Orchestre National des Pays de la Loire and Royal Seville Symphony, and Principal Conductor of Orchestra Sinfonica di Milano Giuseppe Verdi. He was appointed as Principal Guest Conductor of City of Kyoto Symphony in April 2020. Axelrod has appeared with orchestras including Gewandhausorchester Leipzig, Orchestre de Paris, London Philharmonic, Orchestra dell'Accademia Nazionale di Santa Cecilia, Danish National Symphony, Los Angeles Philharmonic, Philadelphia Orchestra, and Chicago Symphony.



第938回 定期演奏会Aシリーズ

Subscription Concert No.938 A Series

東京文化会館

2021年12月15日(水) 19:00開演

Wed. 15 December 2021, 19:00 at Tokyo Bunka Kaikan

指揮 ● ジョン・アクセルロッド John AXELROD, Conductor

ヴァイオリン ● 南 紫音 Shion MINAMI, Violin

コンサートマスター ● 矢部達哉 Tatsuya YABE, Concertmaster

チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲 二長調 op.35 (35分)

Tchaikovsky: Violin Concerto in D major, op.35

I Allegro moderato - Moderato assai

II Canzonetta: Andante

III Finale: Allegro vivacissimo

休憩 / Intermission (20分)



ストラヴィンスキー：バレエ音楽 《火の鳥》(1910年版) (45分)

Stravinsky: The Firebird (1910 version)

※当初の発表から出演者が変更になりました。

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

助成： 文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)
 独立行政法人日本芸術文化振興会

〈アンケートのお願い〉

本日はご来場くださり、誠にありがとうございます。今後の参考にさせていただきますので、お客様のご意見・ご感想をお寄せください。お手持ちの携帯電話やスマートフォンなどから2次元コードを読み取りいただくか、下記 URL からご回答いただけます。



演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

<https://www.tmsu.or.jp/j/questionnaire/>

Shion MINAMI

Violin

南 紫音
ヴァイオリン



© Shuichi Tsunoda

2005年ロン＝ティボール国際音楽コンクール第2位、2015年には難関として知られるハノーファー国際ヴァイオリン・コンクールで第2位を受賞し、最も期待されている実力派ヴァイオリニストの1人である。

北九州市生まれ。3歳よりヴァイオリンを始める。篠崎永育、篠崎美樹、西和田ゆう、原田幸一郎の各氏に師事。現在、ドイツのハノーファー在住、クシットフ・ヴェグジンに師事。これまでに国内主要オーケストラをはじめ、フランス国立管、リール国立管、サンカルロ劇場管、ミラノ・スカラ座室内合奏団と共演。ビルバオ響（スペイン）との日本ツアーも好評を博した。

2008年3月にユニバーサルミュージックよりCDデビュー、これまでに3枚のCDをリリースしている。2020年のベートーヴェン・イヤーには、清水和音（ピアノ）を迎えてベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ全曲演奏会を行い、大絶賛を博した。2010年ホテルオークラ音楽賞、2011年出光音楽賞、2017年北九州市民文化賞などを受賞。

With her 2nd prize at Concours international Long-Thibaud, Shion Minami attracted a great deal of international attention in 2005. She is one of the most acclaimed talented young violinists. Minami continues her study in Hannover, and at the same time, gives many recitals and concerts in Japan and Europe. She has performed with orchestras including Orchestre National de France, Orchestre National de Lille, Orchestra del Teatro di San Carlo, La Scala Chamber Orchestra, Bilbao Symphony Orchestra, and many other Japanese orchestras.

チャイコフスキー： ヴァイオリン協奏曲 二長調 op.35

1878年3月、ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）は、スイスのレマン湖畔にあるクラランという小さな町に滞在していた。ある日、かつての弟子である若いヴァイオリニスト、ヨシフ・コーテク（1855～85）が彼を訪ねてやってくる。ベルリンでヨーゼフ・ヨアヒム（1831～1907）に師事していたコーテクは、手土産として、新しい音楽の楽譜をたくさん持ってきていた。

チャイコフスキーは、その中にあった、エドゥアール・ラロ（1823～92）の《スペイン交響曲》を非常に気に入り、コーテクと2人で一日中この曲を演奏した。パトロンナジェージュ・フォン・メック夫人（1831～94）宛ての手紙にはこうある。「私はこの曲から多くの喜びを得ました。この曲は、新鮮さと明るさ、小気味よいリズム、美しく、また見事に和声付けがされた旋律を持っています」

この手紙の2日後の3月17日（新暦／以下同）、チャイコフスキーは、作曲中だったピアノ・ソナタを中断して、ヴァイオリン協奏曲の作曲を始める。靈感の爆発は凄まじいもので、5日後には第1楽章、11日後には全楽章のスケッチを仕上げた。彼は第2楽章をまるごと作曲直しているが、それもすぐに終わり、1878年4月11日、この協奏曲は着手からわずか25日で全曲が完成した。

作曲とは対照的に、初演は難航をきわめた。当初チャイコフスキーがこの曲を献呈しようと考えていた大ヴァイオリニスト、レオポルド・アウアー（1845～1930）が、この曲を演奏困難としたからだ。二転三転の末、アドルフ・ブロツキー（1851～1929）による初演が実現したのは、完成から3年以上過ぎたあとのことだった。

初演は賛否両論だったが、各地でこの曲を弾いたブロツキーや、後に考え直してこの曲を弾いたアウアーらのおかげで人気は高まり、現在では、ベートーヴェンやブラームスの作品と並び、最もよく演奏される協奏曲の一つとなっている。

第1楽章 アレグロ・モデラート～モデラート・アッサイ 4分の4拍子 二長調
ソナタ形式。穏やかな序奏のあと、2つの主題を、いずれも独奏ヴァイオリンが提示する。オーケストラが第1主題を堂々と演奏する箇所からが華やかな展開部で、カデンツァがそのあとに置かれている。

第2楽章 カンツォネッタ／アンダンテ 4分の3拍子 ト短調 複合三部形式。
チャイコフスキーならではの憂愁に満ちた美しい旋律が歌われる。切れ目なしに終楽章へ進む。

第3楽章 フィナーレ／アレグロ・ヴィヴァーチッシモ 4分の2拍子 二長調
自由な Rondó・ソナタ形式。ロシアの民族舞曲トレパークの旋律による熱狂的なフィナーレ。

（増田良介）

作曲年代：1878年3月17日～4月11日

初演：1881年12月4日 ウィーン
アドルフ・プロツキー独奏 ハンス・リヒター指揮 ウィーン・フィル

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、
弦楽5部、独奏ヴァイオリン

ストラヴィンスキー： バレエ音楽《火の鳥》(1910年版)

20世紀音楽に大きな足跡を残した作曲家イーゴリ・ストラヴィンスキー（1882～1971）が、稀代の天才興行師セルゲイ・ディアギレフ（1872～1929）の依頼によって書いた《火の鳥》《ペトルーシュカ》《春の祭典》のいわゆる「3大バレエ」は、現在もストラヴィンスキーの作品中、最も人気がある。

《火の鳥》はその第1作にあたる。

1909年、ロシア・バレエ団（バレエ・リュス）をまさに創設しようとしていたディアギレフは、次のシーズンの演目として、アレクサンドル・アフナシエフ（民俗学者／1826～71）のロシア民話集から題材を取った《火の鳥》を構想する。しかし、最初にこの仕事を依頼したアナトーリ・リャードフ（1855～1914）は、怠惰な性格だったようで、作曲はいっこうに進まなかった。

そこで彼は、まだ無名の若手作曲家ではあったが、幻想曲《花火》などでその才能にかねてから注目していたストラヴィンスキーに依頼したのだ。作曲は1909年冬から翌年春にかけて行われ、1910年6月25日にパリ・オペラ座で、ガブリエル・ピエルネ（1863～1937）の指揮で初演された。振付はミハイル・フォーキン（1880～1942）、衣裳にはレオン・バクスト（1866～1924）が関わり、火の鳥役はタマラ・カルサヴィナ（1885～1978）、イヴァン王子役はフォーキンが演じた。

この曲は初演から大成功を収め、ストラヴィンスキーは一躍、時代の寵児となる。かねてから、バレエという芸術を非常に愛していたストラヴィンスキーは、この後バレエのための音楽をいくつも手がけるが、《火の鳥》はその最初の作品となった。

《火の鳥》の高い人気を受けて、ストラヴィンスキーは、初演の翌年、演奏会用組曲（1911年版）を作る。組曲は1919年および1945年にも作られており、中でも、編成が小さめで、しかも演奏効果の高い1919年版は世界中で広く演奏され、親しまれてきた。しかし近年は、1910年（全曲）版での演奏も増えてきている。

1910年版は、細かく区切ると全体は以下の25の場面から成るが、煩雑なため、本稿では1919年版組曲に採用された6曲（太字で表記）を軸に解説する。

序奏

第1場

1. カシチェイの魔法の庭
2. イヴァン王子に追われた火の鳥の登場
3. 火の鳥の踊り
4. イヴァン王子は火の鳥を捕らえる
5. 火の鳥の嘆願
6. 魔法にかけられた13人の王女たちの登場
7. カデンツァ
8. 黄金のりんごと戯れる王女たち（スケルツォ）
9. イヴァン王子の突然の登場
10. 王女たちの Rond
11. 夜明け
12. イヴァン王子はカシチェイの城へ突入する
13. 魔法のカリヨン、カシチェイの怪物たちが登場しイヴァン王子を捕らえる
14. 不死身の魔王カシチェイの登場
15. カシチェイとイヴァン王子の対話
16. 王女たちのとりなし
17. 火の鳥の登場
18. 火の鳥の魔法にかかったカシチェイの手下たちの踊り
19. カシチェイと手下たちの凶悪な踊り
20. 火の鳥の子守歌
21. カシチェイの目覚め
22. カシチェイの死
23. 深い闇

第2場

カシチェイの城と魔法の消滅、石にされていた騎士たちの復活、大団円

序奏

低弦が不気味にうごめき、邪悪な不死身の魔王カシチェイの支配する魔の森の夜をあらわす。

第1場

火の鳥（めまぐるしい半音階の上下）、次いでこの魔の森に迷い込んだイヴァン王子（最初にホルン、次にオーボエに現れる旋律）が登場する。「火の鳥の踊り」で火の鳥はあちこち飛び回り、庭園にある黄金のりんごをついばむ。イヴァンが火の鳥を捕らえると、火の鳥は、自分の羽根を1枚与えるから解放してほしいと嘆願する（オーボエ、イングリッシュホルン、独奏ヴィオラの東洋的な旋律）。王子は火の鳥を解放してやる。

次に、魔法にかけられた13人の王女たちが現れる（クラリネット、フルート、独奏ヴァイオリンなどに受け渡される甘美で夢見のような旋律）。王女たちは黄金のりんごで遊び（オーボエ二重奏で始まる明るく軽快な部分）、イヴァンの登場を表すホルン・ソロのあと、「王女たちのロンド」が始まる。彼女たちはイヴァンに、カシチェイに気をつけるようにと言う。

鋭いトランペットとともに夜が明けると、王女たちの自由な時間は終わってしまう。イヴァンはカシチェイの城に突入する。カシチェイの手下の怪物たち、続いてカシチェイが現れる。カシチェイはイヴァンを捕らえ、魔法をかけて石にしようとするが、イヴァンは火の鳥の羽根の力で守られる。

イヴァンは火の鳥に助けを求める。飛んできた火の鳥が、カシチェイと手下たちを魔法で激しく踊らせる。有名な「カシチェイと手下たちの凶悪な踊り」である。続く「火の鳥の子守歌」で、疲れ果てて眠ってしまった怪物たちに、火の鳥は子守歌を歌う（美しいファゴット・ソロ）。

やがてカシチェイは目覚める。イヴァンは火の鳥に導かれて、カシチェイの魂が収められた卵を見つける。これがある限り、カシチェイは死なないのである。イヴァンがこれを地面にたたきつけて壊すと、カシチェイと手下たちは消え失せる。

第2場

「カシチェイの城と魔法の消滅、石にされていた騎士たちの復活、大団円」（1919年版組曲では「フィナーレ」）。カシチェイが死ぬと、彼によって石にされていた人々が息を吹き返し、イヴァンは13人のうち一番美しい王女と婚礼を挙げる。組曲で現れるホルンのグリッサンドが全曲版にはないので、だいぶ印象が異なる。

（増田良介）

作曲年代：1909年12月～1910年5月

初演：1910年6月25日 パリ・オペラ座 ガブリエル・ピエルネ指揮

楽器編成：ピッコロ、フルート3（第3はピッコロ持替）、オーボエ3、イングリッシュホルン、クラリネット3（第3は小クラリネット持替）、バスクラリネット、ファゴット3（第3はコントラファゴット持替）、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、トライアングル、タンブリン、シンバル、大太鼓、タムタム、ブロッケンシユピール、シロフォン、鐘、ハープ3、ピアノ、チェレスタ、弦楽5部、バンダ（トランペット3、ワーグナーチューバ4）